

# アナロギアとしての世界

—トマスとライプニッツ—

酒 井 潔

## 序

トマスの「アナロギア」(analogia) 概念は、その本質的な所で、またライプニッツにも受け継がれている。そしてこの「アナロギア」に基いて、トマスとライプニッツの間には「世界」(mundus) という概念に対する一つの共通した態度が認められる。では、両者は如何なる思想動機から「世界」を「アナロギア」として捉えるのであろうか。この問を正に課題とする本論稿は、具体的には次の四つの点をめぐって進められる。即ち、第一にトマスにおいて、第二にライプニッツにおいて、「アナロギア」概念がそれぞれどのような性格と役割を持っているか、第三に、ではトマスとライプニッツにおいて何故「世界」は「アナロギア」でなければならないのか、そして第四に、両者をそのような「世界」概念へと突き動かしている最も根本的な思想モチーフとは何か、という四つの点をめぐって進められる。

## I. トマスの「アナロギア」概念——存在のアナロギア——

[1] トマスにおいて、有限的諸事物、ないしこれらの全体としての「世界」(mundus) は、何よりもまず被造物 (res creata) として位置付けられている。ここから、かかる被造物としての世界というものと、その創造者としての神との関係が必然的に問われて来る。世界と神とのこの関係について、トマスは『神学大全』第一部第四問第三項「何らかの被造物は神に似たものでありうるか」(Utrum aliqua creatura possit esse similis Deo) で重要な議論を展開している。此処でまず前提されているのは、無限な神と有限な諸事物の間には確かに超越という面が厳しくあるとす

る基本認識である。被造物の次元からの所謂類推をそのまま神に当てはめることは従って不可能と言わねばならぬ。では元々「似ている」(similis)とは一体どのようなことか、これをトマスは分析し、枚举する。その上で結局、神(作用者 *agens*)と被造物(結果 *effectus*)は、類(*genus*)や種(*species*)或いは形相(*forma*)を共にするという意味で似ていることはありえぬと論定する。しかしまた、かと言って、神と被造物の間に如何なる関係も成立せずとするのも明らかな誤りである。では、神と被造物の関係はどのように解さるべきか。この関係としてトマスが考えているのが正に「アナログア」(*analogia*)という概念なのである。被造物が神に似ると言われるのは、例えば或る白い物が他の白い物に似ることでもなく、子が親に「人間」という類または種として似ることでもない。それは、存在を与える作用者と、これによって存在を与えられた結果とが、どちらも存在する者である限り似ている、ということなのである。<sup>(1)</sup>〈存在として似ている〉というこの関係は類や種における所謂“類似”とも言えず、正に「アナログア」と規定される他はない。つまり、被造物は存在という点において、神への「ロゴス」(*lógos*)、即ち神への *proportio*、或いは *ratio*「に従って」(*áνα-*)語られるのである。斯く神に対し〈存在のアナログア〉という関係に立つ被造物は、またそれ故神の存在を「分有」(*participare*)するとも言われるのである。<sup>(2)</sup>

[2]では、トマスのこの「アナログア」概念は、さらに具体的にはどのような特徴を有しているのか。元来「アナログア」なる語は、アリストテレス等にも見出される如く、<sup>(3)</sup>ギリシア語の *ánalogía* から来ている。この語自体既に「関係」とか「対比」といった意味合いを基本的に含んでいることが見てとれる。そしてトマスでも「アナログア」の意味する所は、類や種を共有する類似や類比ではないこと、既述の通りである。即ち、神と被造物の「アナログア」は、親と子が同じ“人間”という類に関して同義的に語られるというあり方ではない。「神と被造物について何事かが同名同義的(*univoce*)に述語されることは不可能である」。<sup>(4)</sup>しかしまた、両者はさりとて全く異義的(*aequivoce*)なのでもない。もし全く異義的だとすると、被造物は神に対してもはや如何なる関係も持ち得ぬということになってしまうからである。同義的でもなければ、また異義的でもないというこの関係こそ「アナログア」なのである。或いは、*analogia*とは *univocum*でも、*aequivocum*でもなく、

言わばその中間に相当しうる概念だとも言えよう。これが、トマスの「アナロギア」概念を探る上で我々が注意せねばならぬ第一の点である。

第二の点は、そのような類の比ではないという「アナロギア」は、トマス自身によって更に「対比」(proportio)と言ひ換えられている点である。同第十三問第五項に曰く：「こうした名称は、神と被造物についてアナロギアに従って、即ち対比に従って (secundum analogiam, idest proportionem) 言われるとすべきである」。この「対比」なる語のもとでトマスが指しているのは、もちろん数量的な比例関係等ではない。二倍とか二分の一とか、或いは等量といった比例は神と被造物の間には指定出来ぬこと、彼自ら確言しているとおりである。<sup>(5)</sup>

トマスにおいて「対比」とはそのような数量的関係に限定された狭い概念ではなく、むしろそれ自体非常に広い概念である。つまり、「対比」とは、およそ或るものが他のものに対して有する任意の多種多様な関係のすべてについて言われるような、そういう包括的な概念だと言ってよい。即ち、被造物が神へ持つ「対比」は、結果が原因へ、可能態が現実態へ、或いはまた被造的知性が神認識へ向かって有するような、そういった諸関係の全部なのである。被造物と神は、それぞれ有限存在と無限存在として一切の量的比例を拒否しながら、しかしそれでいてなお何らかの関係、即ち「対比」を有し、しかもこの関係は単に一義的でなく、多義性、多様性を包含する。「対比」はトマスによってまた habitudo (関係) とも呼ばれ、habitudo unius ad alterum<sup>(7)</sup> や habitudo ad aliquid<sup>(8)</sup> などといった言い方がなされているのである。

[3] すべての被造物は、このように存在の「アナロギア」ないし「対比」という仕方で神に關係付けられている。そして、神へのこの「アナロギア」に基いて、今度は更に被造物相互のあり方が規定されて来るのである。即ち、多様な被造的事物は、正に多様として互いにどこまでも異なりながら、そのどれもが神への「アナロギア」を持つという所から、諸事物相互にも対応や關係が成立するのである。斯く被造物相互に成立する關係ないし秩序 (ordo) もまた、類や種の similitudo ではなく、どの事物 (res) も存在者 (ens) である限りにおいて互に対応し合うという〈存在のアナロギア〉なのである。神と被造物の「アナロギア」を今“垂直のアナロギア”と名付けることが許されるならば、被造物相互のそれを我々は〈有限レベ

ルにおける) “水平のアナログア”と呼べるであろう。そして、多様な諸事物がこのように「アナログア」として様々な仕方<sup>(8)</sup>で相互に対応し、関係し合う所から、ここに一つの全体<sup>(9)</sup>というものが可能になって来る。すべての事物 (res) がそれぞれ何らかの「対比」(proportio) でもって互いに関係し合い、これによって成立する一つの統一的全体、これが「世界」(mundus) である。

この「世界」という概念を我々は日常その意味に注意することなく、言わば漠然と用いている。しかし、抑々「世界」(mundus, Welt) という概念が成立しうるためには、或いは「世界」という事態 (Sachverhalt) を問いうるためには、存在する全ての多様な事物の間に何らかの関係 (relatio) が遍く張り渡されていなければならないだろう。ここで我々が問題とするのは、事物の経験的な、或いは偶然的な現象形態としての関係とか志向性ではなく、事物が正にそれによって世界に存在すると言われ得るような、そういう(事物の)アプリオリな根本体制としての関係である。そしてトマスの場合、そのように事物の世界内存在自体を予め可能にしている関係 (relatio)——それは、再三繰り返すように、それ自体多様なのだが——を総括する概念が正に「アナログア」なのである。トマスにおいて、「世界」(mundus) (または「宇宙」(universum))とは、単に延長 (extensio) や物体 (corpus)、或いは場所 (locus) などと同一視される如きものでは決してない。また、他方、もし被造物が神によって存在せしめられているという面だけが強調され、被造物相互の関係とか秩序 (ordo) がそこに考えられていないとすれば、「世界」というものが哲学的に問題になる余地はなくなってしまうだろう。例えば、神即唯一実体 (substantia) とその様態 (modus) の他は何もないとするスピノザでは、「世界」という概念はその固有な意味を持ちえないのである。そこにはただ「自然」(natura) があるのみ<sup>(10)</sup>である。これに対し、トマスでは、多様な事物が「アナログア」を通じて一つの統一的全体へと織り入れられ、かくして「世界」が正に「世界」として成立する。「世界の統一」(unitas mundi)<sup>(11)</sup>という事もトマス哲学の重要なモチーフの一つであることは記憶されてよい。「アナログア」は神と被造物、被造物と被造物の対比、関係を総括する概念であるにとどまらず、その一層ラディカルな意味として、「世界」概念自体の成立に決定的な役割をはたしている、と言っても決して過言ではないように思われるのである。

## II. ライブニッツの「アナロギア」概念——表出のアナロギア——

〔1〕ライブニッツにおいては、創造論という大前提は動かぬものの、事物 (res) が存在することの意味、換言すれば実体 (substance) の規定は、彼独自のモチーフに沿って捉え直される。即ち、ライブニッツにとって、「存在する」(exsistere) とは「活動する」(agere) ことなのであり、この「活動」とは「知覚」(percipere) ないし「表出」(exprimer) に他ならぬ。存在することは表出することである。どの存在も、実体として、即ち如何なる部分にも分割され得ぬ単純実体＝モナド (monade) として実在する限り、他のすべての存在を、つまり「世界」(monde)、或いは「宇宙」(univers) をそれぞれ一定の仕方<sup>(12)</sup>で知覚し、表出しているのである。但し、この知覚、表出の働きは、ロック等の所謂経験論の立場におけるように、主観の受動 (passion) や印銘 (impression) ではなく、逆にモナド主観の純粋な自発性 (spontanéité) であることに我々は十分気を付けておかねばならない。<sup>(13)</sup> 自発的活動によって世界を自らのうちに表出するモナドは「宇宙の活ける鏡」(un miroir vivant de l'univers)<sup>(14)</sup> と呼ばれるのである。

〔2〕ところで、ライブニッツの説くこの「モナド」なるものが、その第一義的な意味において、人間精神であることは疑いを容れぬ。主観の認識し、意志する働きそのものは如何なる分割をも許さない。また「コギト」(cogito)こそ唯一の明証な実在だとするデカルトの確信も、ライブニッツの「モナド」概念の中に継承されている。自らの一性の内に多を結合し、統一して〈世界の表出〉(une multitude dans l'unité)<sup>(15)</sup>を可能にするという、モナドのこの活動は人間精神にそのモデルをとっている。

ライブニッツにおいてしかし一層特徴的なことは、彼が、そのような人間精神を他の被造的存在から峻別したり、その区別を強調したりするよりは、むしろ逆に人間精神と他の諸存在との間に或る連続的なものを認めようとしている点である。即ち彼は、人間以外のモナド——動物、植物、下等生物等——にも「知覚」(perception)<sup>(16)</sup>ないし「表出」(expression)が行われていると考える。意識の伴う明晰判明な知覚しか認めなかったデカルトを批判してライブニッツは、無意識下の人間や、動物、植物等でも、それらが正にモナドとして〈一において多を統一する〉という体制を

持つ以上は、程度の違いこそあれ、何らかの知覚が行われている、と主張する。<sup>(17)</sup>彼は例えば『人間悟性新論』ではこう言っている：「植物と動物の間にある大いなるアナロジー (la grande analogie) によって、植物にもまた何らかの知覚と欲求 (appétition) が存在する、と私は考えたい。従って、一般に思われているように、もし植物精神なるものがあるとしたら、それは知覚を持つはずである」。<sup>(18)</sup>かくして人間、動物、植物、さらに下等な生物に至るまで、それらはいずれも（自らの内に世界を）表出する者である限りにおいて、相互に「アナログア」を形成するのである。それ故、トマスの「アナログア」概念が〈存在のアナログア〉を指しているのに対し、ライブニッツのそれを我々は〈表出のアナログア〉と性格付ける事が出来るよう。

〔3〕こうしてライブニッツの「世界」(monde) 或いは「宇宙」(univers) は〈表出のアナログア〉に基き、人間精神、動物、植物、そして更に下等な生物へ至る一つの連続した階層を形成している、と言える。<sup>(19)</sup>「世界」を構成するこれらの諸存在はどこまでも多様であり、類や種も様々に異なっている。それらの間に「アナログア」が成り立つといっても、それは、トマスの場合と同様、類や種、或いは形相を共通にするという意味での所謂“類似”ではない。どのモナドも個性的な存在だが、しかし〈表出する〉という点で互いに対応し、関係し合うことなのである。諸モナドはどこまでも相違を含みながら、それでいて互いに無関係なバラバラなあり方ではなく、表出する活動者として対応し、連関し合い、一つの全体的秩序を構成する。<sup>(20)</sup>世界が多をはらみながら、同時に斯く一つの全体的統一を成すという考えも、ライブニッツの重要思想の一つである。

〈表出のアナログア〉は、しかし単にトマスの〈存在のアナログア〉における「存在」という語の代りに「表出」を代入した、というだけの内容に尽きるものではない。〈表出のアナログア〉は更に〈存在のアナログア〉という概念にはなかったそれ固有の性格ないしアスペクトを持っている。それは一言で言えば、互いに表出し合うモナドの志向的 (intentional) な構造である。モナド〔A〕は他のモナド〔B〕を知覚即ち表出すると同時に、またこのモナド〔B〕によっても表出されている。どのモナドもこのような〈表出し・表出される〉という連関の内へ織り込まれているのである。表出するモナドが「宇宙の鏡」(miroir) と呼ばれることも、モナドのこ

の〈映し・映される〉という二重の志向的構造に根差す。ライプニッツにとって、「世界」とは延長物体でも、絶対空間でもなく、正にこのようなモナドの intentional な関係の全体なのである。表出というこの活動を通して各モナドは一つの「世界」に共属する、とも言える。そしてこれによって In - der - Welt - sein という事<sup>(21)</sup>もまたモナドにとって真に可能となるのである。

III. トマスとライプニッツの両者は「世界」を何故「アナロギア」と解するのか以上 I, II の考察を通じ、トマスとライプニッツの「世界」概念において、「アナロギア」という見方が——〈存在のアナロギア〉, 〈表出のアナロギア〉という差違はあるが——共に決定的な役割をはたしていることが明らかとなった。では両者にとって、なぜ「世界」はそのように「アナロギア」として捉えられなければならないのであろうか。

[1] トマスが抑々「アナロギア」概念を提示した経緯をふり返って見ると、その根底には、万物を創造する神は同義的作用者 (agens univocum) ではありえぬ、という彼の確信が存する。つまり、もし神が、子を生む人間のように、自分と同じ種類の結果だけを生じる同義的作用者だとすると、神は自分と同じものしか生めぬという不合理に陥ってしまう。あらゆる多様な類や種を創造する神は、かえって種類の全体を超越した所の、言うなれば非同義的作用者 (agens non univocum) でなければならない。が、またさりとて神は被造物とは全く異義的な作用者 (agens aequivocum) とも言えぬ。故に神は存在ということに関して「アナロギア的な作用者」(agens analogicum) であると結論されたのであった。<sup>(22)</sup>つまり、トマスにとって、agens univocum がはらむ危険——これは、多を産出できぬ故、抽象的一元論や無世界論へも陥りかねない——を回避して、多の創造を確保することが根本動機なのである。この被造的世界が多様性 (varietas) を含むことはトマスにあっては何としても防衛されねばならない課題だったのである。

このように「アナロギア」概念の導入によって、多の創造、及び諸事物の多様性ということがトマスの体系の中で積極的に肯定される。ここから今度は、ではそういう多様な事物相互の関係はどうか、多様な存在がいかにして一つの統一的全体、つまり「世界」を形成するか、が当然問われて来る。そしてここでも「アナロギア」

が要請されるのである。先に我々は「アナログア」即ち「対比」(proportio)が様々なレベルの諸関係を内包する幅広い概念であることを見た。およそ或るものが他へ結ぶ関係のすべてを「アナログア」は統括し、全体統一へもたらし、かくて一つの「世界」が構成されるのである。「アナログア」概念は、多<sup>・</sup>ということを明確に定立し、更にこの多<sup>・</sup>の統一としての「世界」概念を可能にするためにどうしても必要なのである。

〔2〕ライブニッツにおいても、トマスと同様、事物間の関係は当初から考察の中心にあった。そしてライブニッツの habitudo 概念の中にも、トマスの habitudo の思想—多様な諸関係の総体としての habitudo —は、その本質的な所で受け継がれている。<sup>(24)</sup>即ちライブニッツは、「表出」(expressio)の関係が成立するためには、表出する側とされる側の間に所謂「似ている」(similis)ということが必要でない、と確言するのである。<sup>(25)</sup>表出する者の内に被表出対象へ何らかの意味で対応(respondere)するものがありさえすればよい。つまり、表出者が対象への habitudo を持てば、それで表出の成立には十分なのである。さらに彼は、habitudo には多様(varius)なものが存することを例を挙げて説く。例えば、機械の模型と機械、平面図と立体、演説と思考、記号と数、そして代数方程式と円等がある。要するに表出者とその対象の間に「何らかのアナログア」(quaedam analogia)が保たれてさえいれば、habitudo=expressio は成立するわけである。このようにライブニッツの場合でも expressio, habitudo, analogia という一連の概念体系は、事物(res)の多様性や事物間の諸関係の多様性を保証し、強調するものに他ならぬ、と言えるだろう。

ところで、斯く多様性としての世界という見方に立つライブニッツが、論敵として常に鋭く意識しているのはスピノザである。スピノザによれば、実在界には実体(substantia)とその様態(modus)しかない。実体即ち神の因果性は幾何学的必然という仕方で、そして causa per se<sup>(26)</sup>——歴史考証によれば、これは実は agens univocum<sup>(27)</sup>に相当する——という仕方で働くときされる。つまり、どの様態即ち事物も神の属性から言わば分析的に帰結(sequi)<sup>(28)</sup>されるのであり、従ってその限りで神に直結され、吸収されていると言えよう。即ち、事物が事物として見られるよりは、むしろ神因果性自体の方に力点が置かれる。故に、産出された事物の事物としてのあり方、ないし事物相互の多様な対応や関係は、スピノザではさほど問われない。こう<sup>(29)</sup>



して、「世界」(mundus)という概念はスピノザの〈実体—様態〉の存在論においては、その固有な積極的な意義を持ちえないのである。

これに対しライプニッツでは、正に「世界」(monde)ということが重要かつ積極的な意義を担うのである。その「世界」とは統一(unitas)でありながら、なお内に多を多として活かす。そしてこの〈一における多〉を可能にするものとして要請されたのが、多様な関係を包みこむ「アナログア」概念だったのである。ライプニッツの「アナログア」も結局トマスと同様、事物の多様性ということに向けられている、と言えよう。

#### IV. トマスとライプニッツをかかえる「世界」概念へ導いている

##### 根本モチーフは何か

それでは両者において何故世界における事物の多様性が斯く重大な意味を担っているのでしょうか。我々はいよいよ本稿の最終課題にきた。即ち、両者をそのような「世界」概念、つまり多としての世界理解へ突き動かしている根本モチーフは何であるのか、という問である。

この被造的世界に認められる多様性(varietas)、数多性(multitudo)<sup>(30)</sup>、或いは区別(distinctio)、不均等(inaequalitas)<sup>(31)</sup>等の事態は、トマスでは直接創造に由来するものとして前提されている。では神は事物を何故斯く多様なものとして創造したのか。それは、多様な段階(gradus)の被造物を通じて、神が自らの善性(bonitas)<sup>(32)</sup>や完全性をよりよく repraesentare させ、分有させるためである。また、特に人間の救済という面では、「多」ということは精神の個性や不死に深く関わっているのである。

ライプニッツでも、多様性の充満を神の栄光の表れと見ることではトマスとかわりない。ただライプニッツでは、モナドを神への関わりにおいて捉えるよりは、むしろこの被造世界を構成する存在として見る面の方が強いように思われる。「世界」を多と見るようライプニッツを動かしている最大の動機は、人間精神が個的であり、個の実体として不滅であることを主張出来ねばならぬからである<sup>(33)</sup>。これに対しスピノザでは、我々の思惟もまた、神の属性から必然的に帰結すると説かれ、精神の個性(Individualität)はさほど問われない。ために、精神は個性と自由を持った多であること、「世界」はかかる精神的実体の多より成ることが危うくなってし

まう。こうして人間精神が個性を失い、無差別的にアヴェロエスの普遍的宇宙精神に吸収解消されつくすか、もしくは唯物論に陥ってしまう危険をスピノチスムの中にライブニッツが深刻に見てとっていたこと、彼の多くの書簡が示している通りである。だからこそ、ライブニッツにとって、「世界」とは、唯一実体を全てとするスピノザに反してどうしても多でなければならなかったのである。

## 結 語

以上我々が見て来たように、〈アナログアとしての世界〉という理解をめぐって、トマスとライブニッツには一つの共通した態度が認められる。<sup>(35)</sup>それは、「多」ということを、スピノザのように一性の否定ないし頽落形態として言わば消極的に見るのではなく、逆に積極的に前提し、主張する立場なのである。我々はここに、「世界」に多様性をその本質として肯定することの意義というものを改めて注目する必要がある。多様性の無い世界はもはや「世界」ではありえず、ただの“必然的自然”である。そこでは、精神が精神として存在したり行為するような余地はない。従って、そこには自由もなければ、また行為を自らの意志で律するということが、即ち道徳も成立しない。「アナログア」概念を積極的に用い、これを〈多としての世界〉という考え方の基礎に確固と据えることは、取りも直さず、トマスにおいてもライブニッツにおいても、単に論理的な要請から来たものではなく、むしろ、必然的自然観や唯物論に反対して、人間精神の個性と自由をあくまで守ろうとする、敢然とした実存的な態度決定なのであった。

## 註

- (1) cf. *S. T.* I, q. 4, a. 3, c.
- (2) cf. *S. T.* I, q. 4, a. 3, ad 3.
- (3) cf. Arist. *Eth.* I—6, 1096 b 28.
- (4) *S. T.* I, q. 13, a. 5, c.
- (5) cf. *S. T.* I, q. 12, a. 1, arg. 4, ad 4; I, q. 2, a. 2, arg. 3, ad 3.
- (6) cf. *S. T.* I, q. 12, a. 1, ad 4.
- (7) *ibid.*

(8) *S. T.* I, q. 19, a. 2, ad 1.

(9) cf. *S. T.* I, q. 11, a. 3, c.

(10) cf. Spinoza, *Ethica*, I, axiom. 1, 2; *Epistola* 12. (*Opera*, hrsg. v. C. Gebhardt)

三宅剛一『学の形成と自然的世界』(昭和15年, みすず書房刊昭和48年), 第七章, 三, 四を参照。

(11) *S. T.* I, q. 11, a. 3, c.

(12) cf. G. W. Leibniz, *Textes inédits*, publiés et annotés par G. Grua, Paris, 1948, p. 508 (Tome II).

(13) cf. G. W. Leibniz, *Philosophische Schriften*, hrsg. v. C. J. Gerhardt, Berlin 1875—90. (Abk.: G.) ¶ 451, 458, 484 usw.

なお, また拙稿「主観と自発性——ライプニッツ形而上学の根本問題——」(京都哲学会編『哲學研究』第545号, 昭和57年8月刊行。)第二, 三章を参照。

(14) cf. G. ¶ 599, 616.

(15) cf. G. ¶ 608.

(16) cf. G. II 121 f., V 324, 455f.

(17) cf. G. ¶ 600, 608f.

(18) G. V 126.

(19) cf. G. V 455, ¶ 618.

(20) cf. G. ¶ 107 f.

(21) 前掲(註13)の拙稿第四章を参照。

(22) cf. *S. T.* I, q. 4, a. 3, c., ad 3.

(23) cf. *S. T.* I, q. 13, a. 5, ad 1.

(24) cf. G. ¶ 263f. (“Quid sit idea”)

(25) cf. G. ¶ 264: Unde patet non esse necessarium, ut id quod exprimit simile sit rei expressae, .....

(26) Spinoza, *Ethica*, I prop. 16, cor. 2.

(27) cf. L. Robinson, *Kommentar zu Spinozas Ethik*. Leipzig 1928, Kommentar zu I prop. 16, cor. 2.; G. Th. Richter, *Spinozas philosophische Terminolo-*

gie, Leibzig 1913, S. 62, u. Anm. 312 f.

拙稿「Productio と Sequentia ——スピノザの場合——」（京大論叢刊行会編『哲学論叢』Ⅹ，昭和57年6月刊行）を参照。

- (28) cf. Spinoza, *Ethica*, I prop 17, schol.
- (29) スピノザでは、せいぜい、物体 (corpus) の衝突や運動の伝達をモデルにとった、事物の因果連鎖が言及されているのみである。cf. *Ethica*, I prop. 28, II (Gebh. Bd. II. S. 97~103).
- (30) cf. *S. T.* I, q. 47, a. 1, c, ad 2.
- (31) cf. *S. T.* I, q. 47, a. 2, c.
- (32) cf. *S. T.* I, q. 23, a. 5, ad 3.
- (33) cf. *G.* V 529 ff. “*Considérations sur la doctrine d’un esprit universel unique*” (1702)
- (34) cf. *G.* IV 283 f. (an Philipp, Jan. 1680), *G.* II 183 ff. (an de Volder, 23. Juni 1699), II 257 ff. (ebd. 10. Nov. 1703)
- (35) 本論稿は、「アナロギア」と「世界」ということをめぐってトマスとライプニッツを一貫する共通のモチーフを主題とするものであるが、しかし、また、ライプニッツが他方でトマスとは異なる要素を持っていることを否定するものでは、勿論ない。両者の分岐点は、今結論を先取りするならば、結局「モナド」と「表出」の概念に尽きると言えるであろうが、この問題についてはまた稿を改めて論じなければならない。